

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

著者	風間 研
出版者	法政大学多摩論集編集委員会
雑誌名	法政大学多摩論集
巻	29
ページ	1-35
発行年	2013-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/8834">http://hdl.handle.net/10114/8834</a>

法政大学「多摩論集」第29号  
2013年3月

# 「誠実な夫人」は同時代人に どう見られたか

風 間 研

# 「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

風 間 研

## 1

アンリ・ベックの「誠実な夫人」は、1880年1月1日、ジムナーズ座において初演された。執筆されたのは、「鴉の群れ」や「ナヴェット」が書かれた後で、「パリ女」以前の、1879年頃だと推測できる。

初演は13回のマチネー公演と、43回のソワレ公演があった。当時は20回以上、上演されれば成功だったから<sup>(1)</sup>、これは成功の部類に入るだろう。

しかし、新聞の劇評にはほとんど載らなかった。その理由は、作者の側にもあったようである。数少ない劇評の1つ、「タン」紙1月12日付に、フランシスク・サルセー<sup>(2)</sup>が書いた次の記事<sup>(3)</sup>を読むとそのへんの事情が分かってくるだろう。

「ジムナーズ座は、1幕ものの戯曲の初演をした。アンリ・ベックの『誠実な夫人』である。だが、慣行どおりにその上演を予告し、新聞記者たちを招待する代わりに、ベックは、上演を出来る限り隠した。そして、あたかも、彼にとって恥ずかしいことかのように、元旦の日々の騒ぎの最中に、上演を隠してしまった。……私は、アンリ・ベックの芝居を見に行った。戯曲は、金銭的な成功は見込めないだろう。最初の考えは、非常に単純なものである。即ち、若い男が誠実な夫人である既婚女性に言い寄る。夫人は、男を魅力的な若い娘と結婚させ、幸福にすることを決める。たとえ、彼が望まなくともだ。そして、彼女はそうする。それだけの話である。ごらんの通り、たいしたものはない。会話が1つあるきりである。」

もう1つの劇評は、1ト月ほど経ってから「ヴィー・モデルヌ」紙<sup>(4)</sup>に載った

ものである。次のように書かれている。

「少し前に、ジムナーズ座で、ベック的一幕劇『誠実な夫人』が上演されたが、(上演後に) 劇評もなくほとんど秘密だった。」

私たちが発見した初演の劇評は、これら2つだけで、どちらも、戯曲自体の言及の少ないものだった。あたかもベックが意識して1月1日に上演し、劇評家たちの観劇を妨害し、上演を隠したと読めぬこともないが、実際にはそういう事実はなかったようだ。<sup>(5)</sup>

再演されたのは、5年後の1885年2月、ルネッサンス座においてである。オーギュスト・ヴィチュは、その時の劇評で<sup>(6)</sup>、初演のことも併せて書いている。

「ジムナーズ座ですでに上演された小品『誠実な夫人』が再演された・・・そこには、気取りのない美德をもち、フランス婦人の才気煥発な良識をもった、シュヴァリエ夫人や若いジュヌヴィエーヴを、見る事ができた。彼女たちの確固たる価値は間違いなく、クロチルドの墮落より真実であり、同時に、(フランス婦人として) より一般的だった。」<sup>(7)</sup>

更に、翌年2月には、コメディ・フランセーズ座で、「誠実な夫人」が再々演されることになったが、オーギュスト・ヴィチュは、その直前の1885年12月22日付「フィガロ」紙にも、関係記事を書くことになる。

「コメディ・フランセーズ座は、『誠実な夫人』を、サン・マルタン通りの粗末な舞台(ルネッサンス座)から、取り上げることに反対しなかった。・・・コクラン兄をそのトップとするコメディ・フランセーズ座のソシエテールの何人かの率先した行動によって、『パリ女』がリシュリユー通りの、輝かしい観客たちの前での上演のために戯曲を手放すことに、ルネッサンス座(支配人)も、最初から執心しなかった。しかし、彼らの素晴らしい喜びは、些細なことで中断した・・・」<sup>(8)</sup>

この記事からは、ベックの「パリ女」のコメディ・フランセーズ座での再演が実現しなかった様子が伝わってくる。そのため、代わりの作品として「誠実な夫人」が上演されたと読めぬこともない。

そして、「誠実な夫人」を扱った劇評は、この再々演の時になって始めて多数、

### 「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

書かれたのである。なかには、その時、初めて戯曲の存在を知ったと記した劇評もあった。こうしたことから、**「パリ女」**に比べて**「誠実な夫人」**の認知度が、発表当時かなり低かったことが窺えよう。

「今晚、コメディ・フランセーズ座で、新作が2本上演された。私は間違っていた。『誠実な夫人』は、すでに上演されていた。何処でだ？ ルネッサンス座においてだ。ルネッサンス座で、だって？ そうだ。・・・結局のところあまり重要でない劇場で幕が上がった芝居が、突然、コメディ・フランセーズ座という大きな劇場を占領したのを、観客が見たのは初めてのことだと私は思う。」<sup>(9)</sup>

「モニタール・ユニヴェルセル」紙のエドゥアール・ティエリ<sup>(10)</sup>はこう記したが、前述した**「フィガロ」**紙のオーギュスト・ヴィチュもまた、同じ内容の記事を書いていた。<sup>(11)</sup>

1885年2月8日のルネッサンス座での再演の劇評が多く書かれなかったのは、併演された**「パリ女」**の初演を巡って問題が生じたためである。

ベックは、1882年にコメディ・フランセーズ座で上演された**「鴉の群れ」**<sup>(12)</sup>が原因で、すでにスキャンダラスな作家というレッテルが貼られていた。従って、新作はモラルの欠如した自由奔放な女性の話という噂だけが、上演以前から喧伝されることになり、初日の劇場では何かが起こるのではないかと、人々の関心の的になったのである。

**「誠実な夫人」**の方は、一幕劇で、すでに上演されていた再演ということと、その**「添え物」**としての位置付けがあったため、ほとんど話題にならなかった。従って、劇評も書かれることがなかったのだと思われる。

この時、**「誠実な夫人」**は、19回、上演された。

一方、上演前から心配されていた**「パリ女」**の上演初日は、実際には何の騒ぎも起こらず、予想に反して観客の大喝采で終わった。支配人の杞憂だったようだ。それは、最後の何回かの併演が**「誠実な夫人」**ではなく、同じ作者の**「ナヴェット」**だったことから推測できるだろう。更に、12月に**「パリ女」**が再演された<sup>(13)</sup>、その際の併演もまた**「誠実な夫人」**ではなく、**「ナヴェット」**だったことから確かなことのように見える。

だが、逆に言えば、これらの事実は、「誠実な夫人」が、「添え物」の戯曲で、それ自体にはあまり価値がないと、結果的に、演劇関係者から思われる契機となってしまったとも言えるだろう。

そして、その後長いこと、この時の「添え物」としての評価だけが定着し、一般に「誠実な夫人」は、それ以上の評価がなされなくなってしまったように、私たちには見えるのである。

にもかかわらず、この戯曲は、「パリ女」よりもずっと早い、1886年10月27日に、着任早々の支配人、ジュール・クラルティ<sup>(14)</sup>のもとで、コメディ・フランセーズ座に、レパートリー入りしてしまう。すでにここで上演されていた「鴉の群れ」が、その時までレパートリー入りを果たしていなかったことを考え合わせると、これは異例のことだったと言える。国立劇場のレパートリーになるということは、高い「評価」が戯曲に下されたことを意味するからだ。これは、ベックの全作品を考えるうえで、極めて栄誉ある事件だったと言えるだろう。

「パリ女」の方は、そのあとも紛糾し上演されることもなく、やっと4年後の1890年になって、レパートリー入りを果たし上演に漕ぎ着けた。しかし、その時の実際の舞台の方は期待通りにいかず、結果的に無残な失敗に終わり、都合17回しか上演されることはなかった。<sup>(15)</sup> もっとも、それは、戯曲自体に問題があったというより、作者と支配人クラルティとの確執が原因だったというのが、現在まで一般に伝えられている理解である。<sup>(16)</sup>

従って、「誠実な夫人」の方は、別の作者の戯曲「ムシュー・スカパン」<sup>(17)</sup>と併演されて、1886年10月27日に、コメディ・フランセーズ座での初演を迎えたのである。結局、この年は、20回、上演された。翌1887年は、18回。1888年は、8回。1889年は、10回と、順調に上演回数を伸ばしていく。

1890年になると、やっと初演された「パリ女」と併演されて、17回、上演された。しかし、上記したように、「パリ女」の上演は失敗したので、「誠実な夫人」だけがその後も他の演目と併演されて上演数を延ばしていった。1891年、5回。1892年、15回、1893年、2回である。<sup>(18)</sup>

戦時中の1916年には5回上演され、戦後再開された、エミール・ファブル<sup>(19)</sup>が支配人だった1923年は18回、上演された。以後、1934年まで、年に数回、

上演され、結局、この年までに、通算、159回。他の劇場での上演を入れると、通算で299回の上演回数を誇ったという。<sup>(20)</sup>

ちなみに「パリ女」が、コメディ・フランセーズ座で再演されるのは、ベック死後の1909年で、その後、1936年までに、年に数回、上演され、通算で181回、上演されている。この時期になって、こちらの方も名誉を挽回したようだ。

ベックの研究者、アルナウトヴィックによると、上演回数については、信憑性が低いものの、それでも、ベック戯曲のなかで最も上演数が多いのは、「誠実な夫人」だという。更に劇場以外の場所での上演もあるというのだ。氏があげるのは、たとえば、1889年には「ヴァランスの芸術家連合」のガラ公演で、コメディ・フランセーズ座の役者によって、この戯曲が上演されたことがあるという。<sup>(21)</sup>

それにしても、ベック自身が「回想録」に「その価値以上の成功をした」と書いた<sup>(22)</sup>この戯曲が、なぜ、作者の戯曲のなかで一番上演回数が多いのだろうか？ それは、芝居に魅力があったからではないのか？ 私たちには、繰り返し読んでも、これが価値のないものだとは思えないのである。私たちにこの論文を書かせた契機は、そこにあった。

## 2

主たる登場人物は3人。シュヴァリエ夫人、ランベール。そして、夫人の友人の娘ジュンヌヴィエーヴである。

舞台は、パリ郊外、フォンテヌブローにある、シュヴァリエ夫人の自宅。その隣の家が、パリジャンの青年、ランベールの叔母の家で、そこに青年は短期間、避暑のため滞在している。この青年が夫人の家を訪問して交す2人の取り止めのない会話で芝居は成立している。とりたてて事件が起こるわけでもない。2人の脈路のない会話から、同時代の家庭の主婦の生き方が見えてくると言えないこともない。更には、当時のパリの社交界に生きている、有産階級の青年たちの生き方考え方も垣間見える。

舞台では、ランベールの来訪が、女中の口を通して告げられて始まる。

シュヴァリエ夫人は、ナブキンの縁かがりの最中である。夫人は「縁かがりで

も、名前つけでも、つぎはぎでも、みな自分です」、「女中みたいでしょう？」<sup>(23)</sup>と来客に向かって言う。ちょっと得意げだ。これが、当時の専業主婦の主たる仕事だったのだろうか？ 来客の前でも手仕事の手を休めないところを見ると、彼女にとって、ランベールは、すでに気心の知れた来客ということなのだろう。

青年は、夫人に会うと早々に、「奥さん、ここに居られて、ぼくは幸福です」と言う。その理由は、「避暑にやって来て、あなたのようなご婦人と出会えた」からで、「あなたは人を喜ばすようなことは何ひとつなさらないのに、それでいて、人を喜ばすことがおできになる」。と、見え透いた「口説き文句」を並び立てる。

青年は、この地の人々が退屈で陰気、にもかかわらず詮索好きな人ばかりで、会話ひとつ楽しむことが出来ない。だから、夫人と会話することだけが、唯一の慰めだと続ける。

聞いていた夫人は、青年がパリの社交界と比較して話しているのだと納得する。もちろん、気分的には満更でもない。夫人は夫人で、パリの慣わしについては、一家言ある。というか、郊外で暮らしている彼女には、無意識にしろ、パリジャンに對抗意識を持っているようだ。

「昨年の冬、主人に連れられて、(パリの) パレ・ロワイアル座に行きました。私どもの横の席には、素晴らしい女の方がいらっしゃいましたよ。嘘ではありません。若い男の方たちが、20人ほど会いにいらっしゃっていましたから。・・・1人は花をもって、もう1人はお菓子を、別の方は扇子をもっていらっしゃいました。そして、その女の方はそれらを皇妃様のようなご様子で受け取っていらっしゃいました。・・・エステルとか、呼ばれていましたけど・・・ご存知ですか？」<sup>(24)</sup>

青年は、もちろん女性を知っていた。そして、「彼女のことは話にならない」と鼻先で笑う。パリで彼女を知らぬ者はいない。その噂話だろう、夫人に近寄ると耳元で、そっと何かを囁く。夫人が「みんながですって！ まあ、可哀想に！」と返事しているところを見ると、おそらく、彼女は有名なドゥミ・モンドの1人だと思われる。<sup>(25)</sup>

ランベールは、こうした話題は夫人にふさわしくないと考え、早々に叔母が自分の結婚について、夫人に相談した話に切り替える。結婚相手として「本物の女性」との出会いを待っている青年としては、そう簡単には結婚などできず関心のない話だと言う。



それに応えて、夫人は「またその種の女性のことを言ってる？ 卒業できないんだから」<sup>(26)</sup>と、青年の周辺にいるらしい、エステル嬢と同じ類の女性たちを想像して、言う。

青年は、「ぼくはそんな極端な人間ではありません」と返答し、若い頃には無茶もしたけれど、いまでは、パリの社交界の中で、ごく平凡に日々を送っていると反論するのだ。

こうして、2人は、丁々発止に会話を楽しむのだが、話し込んでいる青年を唐突に夫人が遮る。

「ちょっと黙って！ 物音が聞こえませんでした？ 子供たちが私を呼んだような気がしたのですよ」<sup>(27)</sup>。夫人が中座すると、1人その場に残された青年が内面を吐露するのが、第3景だ。「夫人は誠実なのだろうか？」<sup>(28)</sup>と自問するのである。裏には、自分の甘言に彼女が乗ってくるか、という期待感がある。

一方、夫人が優しく接してくれるのは、色恋からというよりは、むしろ友情にも見える。どちらが彼女の本心なのだろうか？ やはり「誠実」な夫人で、軽薄な行為は厳禁なのだろうか？

夫人が子供部屋から戻って、第4景になり、2人の会話が再開する。子供たちが自分に甘えたくて、声を上げただけで、別にとりたてて用があったわけではない。育児は難しいと、青年に同意を求める。

一息ついたところだからだろう、夫人は青年にワインを勧め、ある種打ち解けた態度をとる。青年は親密さが増した夫人の態度に勇気づけられ、大胆な行動に出る。浮いた台詞を並べると、あからさまに気を引こうとするのだ。夫人は、「お世辞はたくさん」<sup>(28)</sup>、そういう話なら「あなたの叔母様のいる所で伺うわ」と、話を逸らす。

青年は夫人の関心を引いたと勘違いをし、更に、積極的に際どい会話をしようとする。だが、夫人は「私は、主婦です」と穏便に答えつつも、「あなたはお友達です」と釘を刺し、青年に反省を促す。青年は、一瞬たじろぐものの、ここまできても夫人の真意を理解できず、懲りずに再挑戦を試みる。立ち上がると、もう1度、アタックしてみるのである。だが、夫人は、この時になって軽薄な態度を手厳しく咎めるのだ。

「・・・やっと、あなたのことを理解しました。いったい、あなたは、何を考え

ておいでなのでしょう？ 私は人の妻なのですよ。結婚して6年になるんですよ・・・なのに、あなたは他人の妻を手に入れようとしてる。家庭の主婦との情事を夢見ているんですね。<sup>(29)</sup>」

夫人の態度は凜としたものだった。青年は本心を見抜かれ、狼狽するしかない。口調こそ穏やかなものの、キッパリと退室を命じられ、言われるまま帽子を取りに行く。しかし、その時になっても、まだ本当に「彼女は誠実なのだろうか？」とその真意については訝ったままだ。

そういう状況のなかで女中が現れ、第5景が始まる。「デュボン嬢の来訪」が告げられるのだ。そして、旅行服を着たジュンヌヴィエーヴが到着するのである(第6景)。成り行きから、帰るタイミングを失ったランベールは、そのままそこに立ち尽くすことになる。

夫人は、手渡された彼女の母親からの手紙を読んでいる。母親は夫人の親友だ。ジュンヌヴィエーヴのことは、自分の娘同然に可愛がってきた。手紙からは、21歳になる彼女の結婚について、母親が案じている様子が読み取れた。

このことは、夫人自身に新しい関心事が誕生したことを意味する。手紙を手には、心当たりはないかと、しばし思案に暮れる。と、その時、彼女の目に入ったのは、目の前にいるランベールの姿だった。

「ちょうどいいじゃない？ この人たち、完璧にふさわしいわ。どちらにとっても！」と独言を言うと、ジュンヌヴィエーヴの「あの男の方はどなた？」という質問に、ランベールに聞こえないように答える。

「隣人よ」

「結婚してるの？」

「結婚してるわよ。あなた、彼のこと、どう思う？」

「別に」

「別にですって！ あなた、そう思うの？ わたし、あなたをだましたのよ。彼は未婚なの。よくご覧になって！」

「彼は素敵だわ」<sup>(30)</sup>

それから、夫人は微笑みながらランベールの方に向かうと、「帰らないでください。考えが変わりました。もう少しいて欲しいのです<sup>(31)</sup>」と、言う。ランベール

にしてみれば、夫人の態度が、一変して優しくなった理由が分からない。先刻の剣幕はどこへ行ったのだ。

もちろん、この間の女たちの会話など、耳に入る筈がない。だから、夫人の突然の変化に一瞬戸惑う。しばし考えた末、彼は、これを自分への「心変わり」だと理解する。

舞台は、訪問客を迎える準備のため夫人が中座し、そのまま、7景に突入する。ランベールは、懇意らしいジュンヌヴィエーヴから夫人のことを聞き出すのに、いい機会だと考えた。「本当に夫人は幸福なのですか？・・・何かが不足していることを後悔することなく生きているように思えますがね。」<sup>(32)</sup>と、試すような質問をしてみる。

しかし、頭から夫人が幸福だと考えている彼女の返答は単純だ。「何が夫人に不足しているのです？　女が望むものは、全てお持ちですわ。立派で揺るぎのない地位をお持ちで、夫は彼女の思い通りになるお方。そして、男の子と女の子という2人のお子さんにも恵まれています。」<sup>(33)</sup>

ジュンヌヴィエーヴは更に自分のこと、即ち子供たちへの愛着とか、彼女自身が「良い主婦」になれるかどうか不安なことを話す。

「他人の子供なのにあんなに心が結びついてしまう。自分の子供だったら、どれほど愛することになるのでしょうか？」<sup>(34)</sup>

ランベールは、そつなく会話を進めているが、もちろん、面前にいるこの女性に関心などない。愛想良く「あなたは素晴らしいお母さまにおなりになるでしょう」<sup>(35)</sup>と差し障りのない返答をしたのは、話の流れからだろう。

「私は若い娘なら誰もがするように、結婚のことを、とてもよく考えます」<sup>(36)</sup>と、彼女はもろすが、自分が家庭内でどんな振る舞いをするのかも、どんな夫がいいのかも、全然分からないと告白する。

「日によっては、痩せてて、茶色の髪、真面目な男の方がいいのかとも思いますし、別の日には、金髪で、小肥り、生活を楽しむ男の方がいいのかとも思ったりします」<sup>(37)</sup>。そして最後は「誰かに紹介された男の方と結婚してしまうのでしょうか」と、夫を自分の好みで選べぬことを嘆き、「家庭生活では、夫などたいして重要ではないのです」と、自身を納得させているのである。

だいたい夫は仕事を理由に不在がちで、妻の所有物になる訳ではない。シュヴ

ァリエ夫人がいい例で、夫人の夫は留守がちで、ほとんど一緒にいないと言うのである。

この台詞こそ彼が待っていたものだった。そして、これを自分の都合のいいように理解する。夫人が「幸福」な理由は、「夫の無関心」だと勝手に決めてしまい、だったら、自分が出る幕もある、と考えるのである。この考えは、先刻、夫人が「心変わりした」と理解したこととも合致してくる。

ジュンヌヴィエーヴは、「たぶんそうだ」と応えるものの、すぐに訂正する。「あなたが私に言わせたことは、とても悪いことです。とても悪い」<sup>(38)</sup>。おそらく、それは「誠実な夫人」に相応しからぬことなのだろう。それでも、彼女は、夫は「家庭内と外では、全く違う」と言う。家の中で「小言を言い続けてる男が、外に出ると別人」になったり、あるいは、仕事のことを妻に話さない。「私たち女は、女中ではありません。我々は、一緒に暮らしている仲間なのです」<sup>(39)</sup>と、自分が考えている夫婦のあり方を言う。

ランベールは、彼女の意見に「子供が慰め」になるだろうと月並みに応え、更に、「化粧もまた、慰めに少しはなるでしょう」と、深い考えもなく応対する。そして、「おしゃべり」する女の騒音を大げさに真似たりもする。

ジュンヌヴィエーヴはとくに反発して強い態度で話す訳ではない。彼女は、意識してなのか、無意識だったのかは不明だが、積極的に持論を展開した。だが、ランベールには彼女の過激さに気が付かない。頭に夫人のことしかなかったからだろう。

結局、2人の会話は、シュヴァリエ夫人が「幸福だ」ということで、落ち着く。しかし、彼女は最後に、「若い女には、大きな話題は禁じられている」<sup>(40)</sup>と言い、自分たち女の地位の低さについての不満を隠さない。

シュヴァリエ夫人が戻ってきて8景になると、大好きな子供たちと遊ぶために、ジュンヌヴィエーヴはこの場を去る。若い女は子供と同じだという時代を強調するためだろう。

第9景は、再び、夫人とランベールの会話である。しかし、状況は以前と異なっている。それぞれが自分の「思い込み」に沿って行動し始めるからだ。2人を結婚させる考えに没頭している夫人は、それに向かって準備をしようとする。一方、ランベールは、一度は諦めたものの、ここにきて可能性が出てきた夫人との関係

の実現にむけた行動に再び出ようとする。

最初に、先刻の叱責を忘れたような振る舞いに出たのは夫人の方だった。それをランベールは、時間がかかったとはいえ夫人の本心だと誤解する。「うまく行き始めた」「完璧に進んでいる」「敗北を認めたぞ」<sup>(41)</sup>と、ランベールの独言が続く。

それは長椅子に座っている彼のところに夫人が来て、「私も横に座るので、少し詰めて下さい」と言った時に、最高潮に達する。「ちょっと急ぎすぎではないのか」<sup>(42)</sup>と、思わず口走ってしまうほどだ。

だが、青年の期待もここまでだった。

夫人は、職務質問をするように、根掘り葉掘り身辺調査を始めるからだ。「年齢はおいくつ?」「ご健康なんでしょうね?」「財産はおありになって?」「確かでしょうね」<sup>(43)</sup>といった具合にだ。

そして、最後に、「お嫁さんを見つけて差し上げました」と言う。ランベールはこの台詞を聞いて心底驚いてしまう。「何ですって? それじゃ、私を引き留めたのは?」<sup>(44)</sup>

こうして、自分が勘違いしていたことに気づくのである。やっと、夫人の魂胆が分かるのである。勢いついた夫人は結婚の必要性を得々と話し始める。同じ社会の出身で、年齢も、家族も、富裕度も、ふさわしい相手が見つければ、それは願ってもないことだ。今回の相手は、遠方に住んでいる訳ではない。先ほどまで一緒に話をしていた相手なのだ。

だが、ランベールは煮え切らない。「あの若い女性のことを、私は気に入った訳でも、気に入らなかった訳でもありません」<sup>(45)</sup>と未だ、夫人への未練を隠さない。夫人の方も「それで結構です」とにべもなく、当人たちの気持ちを無視した返答をするのだ。

こうなるとランベールも観念せざるを得ない。話の流れに逆らわず、今度は自分の方から「持参金はいくらなのですか?」と露骨に尋ねてみる。すると、夫人は、「20 万フランです」と躊躇うことなく答える。「ええっ」という感じだ。この金額は、自分が所持する「財産」として答えた、2 倍の金額だからだ。思わず「20 万フランですか!」<sup>(46)</sup>と繰り返してしまう。

だが、それでも、青年は屈しない。他の理由を探しながら、あれこれ質問を考え抵抗を続け、返事を急かす夫人との間の、「舌戦」が続く。「まだ自分は若い

ら」とか、「彼女のことを良く知らないし」と、愚図愚図と時間を延ばす。更には、「(彼女が)エスプリもなく、不真面目な、軽薄で浅はかな娘だったら・・・とても一緒には生きられない」と、負の仮定までし始める始末だ。更に、「教育にしても、パリと地方では違うし・・・」<sup>(47)</sup>。こうなると、ほとんど難癖に近い。

夫人の方もその度ごとに適当に返答するものだから、最後は、「あなたは、白と尝试してみたり、黒と尝试してみたり、理窟に合いませんよ」と、逆にランベールから言われてしまう。

結局、最後は、夫人との軽いアヴァンチュールを求めていたランベールは、その希望が閉ざされたことを悟るのだ。

「私を得ることは出来なかったかもしれませんが、代わりの女性を見つけたではありませんか」。「女なんて似たようなもの」「シュヴァリエ夫人はいませんが、ランベール夫人がいる」<sup>(48)</sup>のだから、彼女を私だと思って接すればいいだけの話だと論されてしまうのだ。こうして、ランベールは、結婚を決めることになるのである。

10 景になると、ジュヌヴィエーヴに付き添って来た家庭教師が帰途につくというので、夫人は少し離れたところで、1 人、母親にあてた手紙を書き始める。夫人の独言だけが、観客に聞こえてくる仕掛けだ。

「その男はとてもいい感じです」と手紙に書いたあとすぐに筆を止め、青年の方を振り向くと、「魅力のない男ね」と独言を言う。

「(ジュヌヴィエーヴに) 非常にふさわしい」と書いたあとも同様に、「煌めいたところは全然ないわね」と、反対の本音を口にする。

「結婚するとますます良くなる素敵な資質をいっぱいお持ちです」とも書くが、そのあとまたすぐに中断すると、「これが私に(主婦としての) 義務を忘れさせようとしていた男なのよ」と、本心を呟いてしまう。

それでも、最後は、手紙を「そういう訳だから、この男は妻をととても幸福にすることでしょう」<sup>(49)</sup>と結ぶのだ。

こうして夫人のモノローグを終えると、芝居は幕となるのである。

3

すでに見てきたように、「誠実な夫人」の劇評については、一筋縄ではいかない。というのも、初演の1880年には、劇評が極端に少なかったし、1885年の再演のそれについては、故意に無視された訳ではなかったものの、皆無に等しい。従って、劇評の検討は、初演以後ほぼ7年を経た、1886年10月27日のコメディ・フランセーズ座での再々演のものということになる。しかし、この間に、ベックの創作活動を考えるうえで、少なからず重要な事件が相次いで起こった。作者の代表作ともいえる「鴉の群れ」と「パリ女」の上演があったことである。私たちは、それらの影響を受けずに「誠実な夫人」再々演の劇評が書かれたのかどうか、不審感を抱くのである。

具体的に劇評を見ていこう。先ず、劇場で成功したのかどうかである。なにしろ、上演された劇場は当時、パリで最も権威が高かったコメディ・フランセーズ座だったのだから。初演、再演が行われた市井の私立劇場とは訳が違うのである。

上演翌々日の29日の新聞には、早々に成功を伝える劇評が載った。「エコー・ド・パリ」、「アントランジジャン」、「オトリテ」の3紙である。<sup>(50)</sup>

『「誠実な夫人」』は、素晴らしく上演された。女優のピエルソンは、理性的な女性にデリカシーと垢抜けた態度、エスプリといった点で、完璧な調子を与えた。つまり、彼女は、そこで極めて高い次元で、真実らしかった。……こういった(役者たちによる)創造は、この戯曲をコメディ・フランセーズ座における、高い位置に、位置づけるものである。<sup>(51)</sup>

「昨夜、コメディ・フランセーズ座で、この上演は称讃された。」<sup>(52)</sup>

「我々がすでに、ジムナーズ座と、ルネッサンス座で知っている、非常に繊細で、非常に魅力的な喜劇。それは、コメディ・フランセーズ座が放つとくずに(上演した)宝石だった。」<sup>(53)</sup>

これらの劇評を読む限り、取りあえず、観客からのブーイングはなかったようである。だが、これが具体的にどう成功したかについての詳細な記述はない。

もう1つ、「ジュールナル・ド・デバ・ポリティック・エ・リテレル」紙(以下「デバ」紙と略記する)のジュール・ルメートルの劇評<sup>(54)</sup>を見てみよう。彼は、「誠実な夫人、この題名は期待させる。我々はどんな淫らな女を見るのだろう。」

と、「パリ女」で裏切られた経験から、自身が懐疑的になっていたことを打ち明ける。そして、観劇の途中で、

「この誠実な夫人と誠実な娘が、これから忌まわしいことをするのだろうか？ どうなんだ？ もはや私には分からない。というのも、嫌悪すべきことが起こるには、時間が経ちすぎているからである。……私は、完全に期待を裏切られた。夫人は誠実だ。本当に誠実だ。ジュンヌヴィエーヴも誠実だ。そのうえ、魅力的だ。この喜劇の題名は、皮肉でも何でも無い。」と、今回は、タイトル通りの人物がベックの戯曲に登場したことに満足していると吐露するのである。

私たちには、ルメートルのこの反応が、当時、一般的なものだったように思えた。だからこそ、「テレグラフ」紙のカミーユ・ル・セヌのような、極端なものまでが登場したのだと思えるからだ。

「誠実な夫人であるシュヴァリエ夫人が、若いランベールの口説きをかわしたのは、美德によってではないのである。彼女は、愛人そのものを受け入れられなかったのではなく、(自分の愛人として、この男が)充分でないと映ったからなのである。」<sup>(55)</sup>

氏は、このタイトルを額面通りには受け取らず、ベックの戯曲に本当に「誠実な夫人」など登場する筈はないと、最後まで懐疑的だったのである。ここからも、当時広く流布していたベックのイメージの一端が窺い知れよう。

ベック戯曲のイメージは、1882年に、ベックの「鴉の群れ」がコメディ・フランセーズ座で上演された際に引き起こされた劇場内での騒ぎに端を発する。そして、次の作品「パリ女」が発表された1885年には、劇評家も含め、観客にはベックに対する肯定的な立場と、否定的な立場が存在することになった。その後2年近く経った「誠実な夫人」の再々演の時になっても、一部の劇評家は、そのまま同じ「期待感」と「警戒感」とを維持していたと考えられるのである。

こうした事情を勘案すると、これを、「パリ女」との関わり、つまり同じ既婚夫人を主人公とした戯曲の、表と裏の関係にあるものだと、人々が考えたこと、更には、ベック自身も自己弁護の気持ちがあってこれを書いたと疑うことも、無理からぬことだと理解できてくるのである。

その点を直接指摘している劇評も、4つほどあった。たとえば、「リベルテ」紙のポール・ペレは、次のように明確に書いている。



『誠実な夫人』は同時代人にどう見られたか

『『誠実な夫人』は、一種、『パリ女』の埋め合せの、作品である。『パリ女』において、作者は、我々に、間違いなく存在するパリ婦人を、そっと、自分が見たままに見せた。・・・誤りにしろ誤りでないにしろその筆致が、忠実だったため作者は非難され怒りを買った。『誠実な夫人』において作者は、自分が見たもので、我々が見て気に入る、理にかなったパリ女を見せた。』<sup>(56)</sup>

同じ指摘は、他にも、「ヌーヴェル・ルヴュ」紙<sup>(57)</sup>、「ゴロワ」紙<sup>(58)</sup>、「デバ」紙<sup>(59)</sup>紙でも見かけることになった。

こうした事情と関係があったとも思えるのだが、今回は、戯曲自体が駄作で、「何もない」と否定している劇評が多く目につくことになった。

「タン」紙のフランシスク・サルセー<sup>(60)</sup>にしても、「これは、我々が劇場で見たベック作品の中で、最も駄作だ。・・・コメディ・フランセーズ座が、重要性のないこの作品を取り上げたのには、他に理由がある。」と、含みを持った書き方をするし、他の劇評にも「取るに足らない戯曲」と断じている否定的なものを多く見かけた。

『『誠実な夫人』は、愛らしい気の利いた、美德満載の小品でしかない。3人の役者は、取るに足らないと思われているこの小さなコメディの3つの役を、才能豊かに演じた。』<sup>(61)</sup>

「それ以外の場所は、無害な幕間狂言である」<sup>(62)</sup>

「私は、大きな喜びを持って、彼の最も取るに足らない戯曲の1つが、コメディ・フランセーズ座のレパートリに入ったことに、敬意を表する。』<sup>(63)</sup>

にもかかわらず、ルメートルの記述に見られたように、戯曲が「既婚女性が踏み外さない道」とか「不実をしない、誠実な妻」を題材にし、当時の演劇で不可欠な「美德」を扱っていたためだろう、「内容は何もない」と否定しつつも、部分的に評価することになったと思える劇評も多く目につくことになった。

「舞台は、『誠実な夫人』から始まった。これは、愛らしいベルキナード<sup>(64)</sup>であり、完璧な道徳の芝居である。ここには、『パリ女』と『鴉の群れ』の作者の力強い特徴が全然ない。』<sup>(65)</sup>

「真っ直ぐで思慮深いといった意味、そして、断固として堅実なエスプリにおけ

る、好人物たちが主人公である。それは、理性と論理による美德の人たちであり、義務とか定まった道から外れるのは、間違いと裏切りでしかないと感じている主人公たちだ。』<sup>(66)</sup>

「彼女の誠実さや、彼女の静かで動揺のない生活、家庭生活の平穏さに男が魅せられたのだと、夫人は考えた。こうした幸福が、ジュヌヴィエーヴと結婚することで分かるだろう。夫人がそう説得したので、男は結婚することになるだろう。』<sup>(67)</sup>

「美德がある喜劇は、何という喜びだろう。』<sup>(68)</sup>

だから、言い寄る男に対し、毅然とした態度で対処した「誠実な夫人」に大喝采を送ることにもなったのだろう。

「男が夫人の家を訪れる。男は独身で女は人妻だ。男は思い切って告白する。誠実な夫人、家族の善良な母で主婦は、無礼に対して毅然とし、男を追い払う。』<sup>(69)</sup>

「家族の誠実な母である夫人は、男を家から追い出す。』<sup>(70)</sup>

ここからは、当時考えられていた「主婦の誠実さ」が浮上してくるだろう。そして、改めて、この時代、演劇で「美德」を扱うことがいかに重大だったかを確認するのである。

もっとも全部で17あった劇評の全てが、「取るに足らない戯曲」だとしてみな同じような反応をしていた訳ではない。長所を指摘している劇評もあることはあった。

そのなかで、とくに多かったのは、作者ベックが現実の生活を深く観察し、それを舞台上で反映したことを評価しているもの、つまり、リアリティある舞台展開についてのものだった。

「パリ女」を上演して以来、すでに演劇に社会を投影しようとするベックの意志は周知のこととなっていた筈だから、そのためには、日常生活と同じリアリティがベックの舞台には不可欠。そして、そのリアリティのために、ベックの「観察力」が卓越していたと指摘するのである。

たとえば、「いちばんの駄作」と書いたサルセーでさえも、ベックの観察力については、認めざるをえなかったようだ。氏は、夫人が娘に「あの男のことをどう思う?」と尋ね、小さな嘘をつく場面を引き、「我々(観客)は感嘆と喜びの叫びを

あげる。何と観察が深いのだろう！ このベックという男は。彼の筆は解剖刀だ。』<sup>(71)</sup>と称賛した。

また、1882年の「鴉の群れ」の劇評で、本来「演劇とは観客のための気晴らし」だと主張していた<sup>(72)</sup>ものの、「パリ女」初演の劇評の際には、ベックに「判然としないものの何か別のもの」を認めることになった「フィガロ」紙のヴィチュまでもが、その理由として「繊細な観察」をあげている。

「ベックの喜劇は、美しいものと、繊細な観察とでいっぱいだ。それらは、コメディ・フランセーズ座を選んだ観客に、喜びと良い趣味とをもって聞かせることができた。だからこそ、レパートリーに決まったのだ。』<sup>(73)</sup>

「アントランジジャン」紙のフォシュリも、「ジュヌヴィエーヴが男に向かって、結婚について彼女が考えていることを説明する場面、つまり夫が結婚生活でほんの少しの場所しか占めないことを説明する場面は素晴らしい。』<sup>(74)</sup>それらは、ベックの観察力の成果だとする。

そして、正しく観察をして創作すれば、それは現実をそのまま描写することになり、舞台のリアリティが増す。それを観た観客に「自然らしく」感じさせることが、舞台では大切だと書いたのが、「ルヴユ・ド・ドゥ・モンド」紙のルイ・ガンドラだ<sup>(75)</sup>。

「夫人は彼を友人の娘と結婚させる。単純な話だ。……この単純性は我々に心地いい。この単純性が自然らしいからだ。それが自然らしければらしいほど、ますます、我々には心地いい。……劇場において、観客は、連日、力いっぱい、そういう自然らしさを要求するように、私には見える。彼らにとっては、自然でないことは、すべて『おかしなこと』に見えるからだ。……どんなに小さくてどんなに単純な喜劇でも、観客の心をつかみ取るのは、自然らしさと類似しているおかげなのである。」

これらの劇評を総合すると、美德を扱った点と、リアリティに富んでいた点で「誠実な夫人」を評価しているものの、それ以外の論述については枝葉末節な事柄が多く、本質を衝いていない印象を受ける。確かに、全体として「誠実な夫人」の評価が、他のベック戯曲と比べてあまり高くなかったように見えることも、また事実なのである。

私たちはベックの主要戯曲については、すでに処女作以来、それぞれ考察を行い、ベック戯曲が持つ「新しさ」について考えてきた。大きく言えば、ベックは、当時の常識に逆らって、自分が生きている時代や社会が抱えている問題点を反映させた戯曲を書き続けてきた、と言えるだろう。だから、当時、話題になったエミール・ゾラ<sup>(76)</sup>を中心とする「自然主義」の一派に分類される誤解も生まれたのだが、実は、ベックが演劇で目指していたのは、そうした流れとは無関係な独自のものだった。それは、「誠実な夫人」初演後に上演され、いまでは代表作となっている「鴉の群れ」や「パリ女」の分析を通して、すでに見てきたところである。<sup>(77)</sup>

ベック戯曲の特徴として、見ている観客に、簡単には理解しにくい「謎」を多く残すということがあった。それは、観客が腹を抱えて笑えばそれでいい、当時の「受け身」なブールヴァール演劇への反発でもあった。ベックの考える演劇では、観客自身に「はてな？」という疑問を抱かせる、つまり、観客の頭に直接訴えて、観客に「考えさせる演劇」を提唱していたからだった。

「誠実な夫人」が同じ既婚夫人を題材にした「パリ女」ほど当時の観客の関心を引かなかったことは、すでに劇評で見てきたとおりである。むしろ、2つの戯曲の間には、作品として出来不出来があったようにすら見える。果たして、本当にそうだったのだろうか？

もちろん、一幕劇という事情はあったのだろう。再々演まで劇評が書かれなかったという事情もあったのだろう。確かに、私たちは、戯曲の執筆及び初演からかなり時間が経った劇評しか読むことができなかった。

しかし、劇評家たちは、「パリ女」初演の際に併演されていた「誠実な夫人」も観劇していた筈である。だが、後者の劇評は書かなかった。何故だろうか？ 書くことがなかったからだろうか？ もちろん「パリ女」の初演を巡って書くべきことが多く手が回らなかったという事情もあっただろう。それでも、彼らは2年近く経たず再々演時には劇評を書いているのである。これをどう理解したらいいのだろうか？

同時代人からの評価を考えるうえで、この点は重要な意味をもつことになりはしまいか？ 「誠実な夫人」の劇評は、他のベック戯曲のように上演直後に書かれ

たものではない。だったら、「パリ女」においてベック戯曲の「新しさ」、あるいは他の戯曲との違いを指摘した劇評家たちが、ほぼ2年後の「誠実な夫人」の劇評で変化したのかどうか、確認する必要があるのではないか。2つの戯曲に共通する特徴はなかったのだろうか？ これらを考察することで、何か別の新しい視点が見えてきはしないか？ こう私たちは考えた。

ただ障害があった。それぞれの新聞の劇評は、いつも同じ劇評家によるものとは限らないからである。また、一口に劇評と言っても、戯曲を分析せず曖昧な記述だけで終わらせているものも多い。両方の劇評を書いたものの中から、戯曲に何らかの「違和感」をもち、詳細な持論を展開した劇評家について、私たちは、もう1度、考えることにした。

当時の劇評界の大御所ジュール・ルメートルの記述を見てみよう。

氏は、「パリ女」再演の劇評で、「この風変わりな戯曲」と書き、その独創性について、2つの点をあげた。

「(ベックが書いた) 観察の喜劇の中では、これらの台詞は、極めて稀な刺激的なものである。ほとんどこういった台詞だけで作られている点が、『パリ女』の独創性である。……そして、もう1つの独創的な点は、人物たちが芝居の最後において、最初におけるのと全く同じ状況と、全く同じエスプリの状態にあることである……人物たちは、円の周りを回り、最後に出発点に戻る。……ドラマとは筋の展開を意味する。登場人物たちは、前に進む。道をつくり、出発点とは違った形で、結果を見つけねばならない。」<sup>(78)</sup>

「誠実な夫人」の劇評においても、「辛口のエスプリ」についてこそ、「何はともあれ、うまくいっている。」と、ほぼ同様の指摘をするものの、全体を読むと、ベックに戯曲の「常識」がないことへの不満に重きが置かれた記述になっている。「善良なシュヴァリエ夫人がいて、その前には、巨大な裁縫用の籠がある。その両側には、ナプキンの山と、刺繍する前のふきん。2人の子供が、外の庭で女中と一緒に遊んでいる。母親は、外で子供たちが何をしているか見に行くために、何度も起きあがる」という幕開きは、戯曲の常識にない。「こんなことはみな隠しておかなければならぬとことなのに！」<sup>(79)</sup>と、ベックの「新しさ」とは別のことにやり興味があったようにも見える。

「フィガロ」紙のオーギュスト・ヴィチュは、「パリ女」初演の劇評で、「偉大な才能の男」が書いたのだから、「作品を認めねばならぬ」と冒頭から書いた。しかし、その一方で先行作品の「模倣だ」とか、「モラルの問題」を皮肉る記述も見られ、「芸術と取っ組み合っている……オリジナルな人物」。「だから約束事を受け入れない」とも書いて<sup>(80)</sup>おり、必ずしもベックの「新しさ」を認めていた訳ではなかった。

氏はここでその時に併演された「誠実な夫人」の再演についても触れているが、それは夫人の「誠実さ」が気に入ったからで、目的はむしろ「パリ女」を非難することにあっただよに見える。

従って、氏は「パリ女」再演の折りには、「無分別な女」をパリ女一般と考え、これを「リアリティある女」だとして執筆したベックへの不満を中心に論述する。観察とか台詞について認めているような箇所がない訳ではないが全体の主張は曖昧で、判断を保留している印象を受ける。<sup>(81)</sup>

そして、「誠実な夫人」の再々演の劇評<sup>(82)</sup>でも、「誠実で魅力的な夫人が、言い寄る若いリベルタンの男を追い払う、そういう筋書き」だと書くに留まり、それ以上の指摘は見られない。つまり、氏は「オリジナルな作家」というレッテルこそ貼るものの、ベックの「新しさ」には言及しないのだ。

「テレグラフ」紙のカミーユ・ル・セヌは、「パリ女」初演の劇評において、これが「注意深く観察されて良く書かれ」た戯曲であり、それは、自然主義の作家たちが使う方法によっていると書いた上で、中身に「心理の発展」があるものの「戯曲がない」ので、「演劇というよりは、医学解剖に似ている」<sup>(83)</sup>と、ベックも「自然主義」も、否定する。もっとも、「その単調さは、作者が意識して行っているもの」で、「反舞台」であるとする指摘は、筆者の意に反して射的を射ていたのかもしれない。

だが、「演劇とは本来、対立関係があって存在する」ものだから、「状況が単に持続するだけだと、舞台は味気なく平坦なもの」になってしまう、とその「違和感」を述べ、だから、「一般の観客にこれが認められたのかは疑わしい」と結んだのを読むと、氏がベックの「獨創性」にこそ気づいたものの、必ずしもそれを評価していた訳でもなかったことが分かる。

「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

翌年の「誠実な夫人」の劇評<sup>(84)</sup>になると、逆に「パリ女」の冒頭のシーンの独創性を評価し懐かしがる。今回はそれが僅かに最後の景にしかない。そして、「それ以外の場所は、無害な幕間狂言」だと断定し、全体としては「新しさ」を認めているというよりは非難しているように見える。

御大のフランシスク・サルセーの反応を見てみよう。氏は1868年の「放蕩息子」以来、毎回劇評を書き、ベック戯曲に関心をもち続けていた劇評家である。「誠実な夫人」の1880年の初演についても、劇評で取り上げた数少ない1人であり、「パリ女」初演の折りには、舞台を4回も見た末に劇評を執筆したと自ら告白したこと<sup>(85)</sup>でも知られている。こうした姿勢からはやがて考えを大きく変える前兆は見られず、ベックには無視できない何かがあると漠然と考え、何とかベックの「新しさ」を理解したいと努力していたようにも見える。

氏は、「パリ女」初演の劇評で「パリ女は変わった話だ……あんた方観客は、劇に、筋の展開とドラマがあり、何か興味あることを望んでいる(筈だ)。ところが、そこ(「パリ女」の舞台)には何もないんだ。何も。これっぽっちも……興奮した観客が叫ぶ。『戯曲は、全く予想がつかない。気が付いているかい? 話がどうなるのか、全く分からないのだ。素晴らしい。もう約束事などいらぬ。約束事を打ち壊せ。人々が出あい、一緒に話し、立ち去る。これが人生だ。事実に基づいて書かれた人生だ。』」<sup>(86)</sup>と、当時一般的だった劇場に気晴らしを求めて来る観客の期待を裏切る、ベック戯曲の独創性を「新しいシステム」と呼んだ。もっとも、この呼称は他の劇評家たちもすでに使っていた。<sup>(87)</sup>

また、再演の際にも、「繊細で奥の深い観察」と「洗練された興味深い対話」を認め、「読者にはルネッサンス座に行くように忠告する」と、プラスに見える評価をしている。<sup>(88)</sup>

そして、「誠実な夫人」についても、すでに見たように、初演の劇評の段階では、「金銭的な成功は見込めない」と書いたものの、「曖昧でない会話」とか「美德を扱うのは難しい」<sup>(89)</sup>といった記述も見られ、可能性を示唆していた。ところが、再々演の劇評になると、「駄作だ」「重要性がない作品」<sup>(90)</sup>と断定し、「パリ女」で認めた「新しいシステム」についての言及もしていない。こうした記述からは、氏自身が、「パリ女」で一度確信した「何か」について、今回は確認できず戸惑っていた印象を受ける。

レオポルド・ルクールは、「パリ女」の劇評<sup>(91)</sup>で、「私はベックの新しい試みに、最大の共感を持っている」と褒め、「モリエールに近い」とまで書く。「若者の中で、ベックただ一人だけが、様式をもたらしただ。その様式は完璧だ。つまり、心理学的であると同時に、劇的なのである」<sup>(92)</sup>とする。

『『パリ女』三幕の中には、言葉の一般的な意味における、いかなる種類の筋の展開もない。従って、いかなる結論もない。・・・『パリ女』は、人生の断片でしかない。そこには、絶えず繰り返される見解があるだけである。演劇の形式のもとでの、分析である。だが、それは、終わりが無い状況の純粋な分析だ。・・・何の解決もない結末。』

この点について、氏は、「誠実な夫人」の劇評を執筆する1ト月前に、別の新聞に「演劇のこの時代の進化」という長文のベック論を書き敷衍する。<sup>(93)</sup>つまり、「始まりも結末もなく・・・ドラマがない」という理由で「パリ女」を認めないのなら、それはモリエールの「ジョルジュ・ダンダン」を非難するのと同じだとし、「クロチルドは、おぞましい者でも共感できる者でもなく、ただ生きているだけ」。だから、作者はありのままを書いただけだとする。

だが、「誠実な夫人」の劇評では、トーンが下がり、とくに「新しさ」には触れず、「私は、大きな喜びを持って、彼の最も取るに足らない戯曲の1つが、コメディ・フランセーズ座のレパトリーに入ったことに、敬意を表する。」と書くのに留まっている。<sup>(94)</sup>

更に、「ベックにとっては、いますぐの成功などどうでもよかった。将来、彼に理由が与えられることは間違いない」と、その「試み」が時期尚早だったと記しているのを読むと、「誠実な夫人」については、「パリ女」と同じ評価をしていないようにも見える。

アンリ・ボエもまた、「パリ女」初演の劇評で、「ブラボー、ベック、新しい芝居だ。日常の存在から実際に取って来られた話。・・・大胆で露骨な風俗の描写。性格（描写）の羅列。誰もが隣人に見かける、自然らしいタイプを並べた。・・・演劇に関する昔からある技巧はみな終わりを告げた」とその「新しさ」を絶讃した。<sup>(95)</sup>

更に、「パリ女」再演の劇評でも、「観察と繊細さの傑作」と書き、併演された



「誠実な夫人」についても、「人生の辛い現実を臆面もなく描く作者によって・・・戯曲が性格(描写)を放棄し」、その台詞には古典主義作家の言葉を見出す「輝かしい才気ある会話」<sup>(96)</sup>をおき、役者たちはそれを、「真実らしく」「自然に」演じたと、同じスタンスでベックの独創性を評価した。

また、再々演の劇評<sup>(97)</sup>では、ベックの「新しさ」こそ詳述していないが、「性格描写」がないことと、「パリ女」同様、「台詞の素晴らしさ」を特徴としてあげ、従来の戯曲と違う点を繰り返した。こうなると、「パリ女」の劇評で論究した「新しさ」については、重複を避けたといった印象をもつ。

「パトリ」紙のクラヴォーもまた、「パリ女」の劇評において、「いかなる展開もない。いかなる筋もない。3人の間の出来事で、事件もない。3人の間で起こる平凡で日常的なくり返し。ボンクラな夫。嫉妬する愛人。良識のない妻。・・・とくに状況は進展せず、後退もしない」。と書き<sup>(98)</sup>、それまでとは違う新しい演劇の誕生を指摘した。

「誠実な夫人」の劇評においても、まず、ベックが「パリ女」で認められたことから論を始め、「長い期間、認められず、もしくは軽視されてきた」<sup>(99)</sup>ベックは、この「誠実な夫人」で、今日、新しいジャンルを創始したとする。しかし、これは「『鴉の群れ』や『パリ女』と比べて、大胆さとか激しさが少ない」ものの、「少し意地の悪い皮肉」と、「ほとんど剥き出しの素直さ」はあるとする。

更に、劇評の対象となる芝居が、「たとえ、内容のない喜劇でも、表には現れない「隠れている事柄」があり、それが、喜劇に深みをつける」と書き、「パリ女」同様に、「誠実な夫人」でもまた、「結末に到達することがないのではないか」と心配させられたと書いた。

「私には、何がプラスされたのか分からないが、少し脂身のある戯曲が魅力的に登場してきたことであり、また、おそらく、我々の想像力だけが、それを補うということである。」と、「誠実な夫人」の魅力を語り、観客の想像力への訴え方が強まったとする。

この劇評からは、氏が「誠実な夫人」が「パリ女」の延長線上にある、同じ可能性ある作品だと指摘していると読む事ができるだろう。更に、隠れていて分かりにくいものを観客の「想像力」で補えと言う、氏の論調は、私たちがベックが目指

していたと考えていることと合致する。観客の想像力が、戯曲を補って、演劇は成立するという、いまの私たちの演劇と共通する認識。これこそがベックの「新しさ」だと考えるのだが、それがすでに存在していたとする、これは指摘に見えるからである。

## 5

「誠実な夫人」のリアルタイムの劇評は以上見たとおりである。

「パリ女」については一定評価されたベックだが、この戯曲に関しては見ていた側からの評価が低かったことを認めない訳にはいかないだろう。こうなると、これまで私たちが検討してきたベック戯曲がもつ「新しさ」は、この戯曲にはなかったと考えるべきかとも思えてくる。

「パリ女」に、戯曲の「新しさ」を見つけて称賛していた劇評家でさえも、「誠実な夫人」については評価を躊躇していた。だいたい、多くの劇評家が、ベック作品の全体を見ることもなく、従って「新しさ」に気づくこともなく、これに「駄作」のレッテルを貼っていたことは、すでに見たとおりである。それでも、私たちは、「(観客の) 想像力だけが補う」「(戯曲に) 隠れている事柄」と、興味深い指摘をしているクラヴォーの劇評を見つけることができた。これはほとんど例外的な指摘と言えるだろう。

少数意見とはいえ氏の指摘は、すでにベックの初期戯曲以来、私たちが検討し発見してきたことの確認でもあった。当時一般的だった、観客を「楽しませる」だけの演劇とは、対照的な作劇法だったと言えるからだ。

私たちは、クラヴォーの記事に勇気づけられた。ここで、氏が指摘する「(観客の) 想像力で補う」「(戯曲に) 隠れている事柄」を、もう1度、より視野を広げて探してみたい。

たとえば、ベックの「観察力」を劇評家たちが評価していた場面に、何か他に「隠れている事柄」はなかっただろうか？ 到着した夫人の家でランベールを見かけ、「あの男、だれ？」とジュンヌヴィエーヴが尋ね、既婚者だと聞いた時は無関心だったのが、独身だと分かると興味を示す、あの場面はどうだろう？ この箇

## 「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

所についてサルセーは、「これがベックだ。感嘆と喜びの声をあげてしまう。何と観察が深いのだ」<sup>(100)</sup>と書いたし、「非常に繊細な表現がある」<sup>(101)</sup>と、ストゥリグも書き、ジュール・ルメートルも「これだ、これがベックの女性だ」<sup>(102)</sup>と書いた。

彼らはこの場面に「パリ女」の冒頭に登場してきた男女を見た時に受けた衝撃を重ねていた。観客は仕草や会話を通して、2人が夫婦だと天から思い込まれる。嫉妬に狂った男の執着ぶりは、夫のそれと見間違うほど真実味があった。だが、そんな観客の思い込みは、たった1つの台詞「夫が戻ってきたわ」で突如、裏切られ、状況が一変してしまう。

観客とは一般に観劇早々、何はともあれ、想像力を逞しくして劇の中に入ろうとするものだ。それが虚構世界で戯れる楽しみとも言える。そして進行するに従い展開の意外性に興奮を求めながら、頭の中で自分なりに戯曲を構成していく、いわば思い込みの世界だ。ここに観劇の醍醐味があるとも言える。ところが、「パリ女」ではその思い込みが突如崩され、肩すかしを食らってしまう。この仕掛けを劇評家たちは絶讃したのである。だが、「誠実な夫人」のこの場面に、これと同じ衝撃を受けることができたのだろうか？

そうでなければ、「テレグラフ」紙のカミーユ・ル・セヌも評価した<sup>(103)</sup>、終幕の夫人の「モノローグ」はどうだろう。自分に言い寄っていた青年ランベールと、旧知の娘のジュヌヴィエーヴとを結婚させる手筈を整えた夫人が、その母親に手紙を書きながら、独言する例の「モノローグ」の場面である。ここで、観客は思いもかけなかった夫人の本心を聞いてしまう。

なるほど、その眩きがあったことで、観客は夫人がランベールのことを、婿としてふさわしいか観察した結果、結婚を勧めていた訳ではなく、単に「結婚させる」というその行為に没頭していた事実に気づき衝撃を受ける。観客は肩すかしを食らい、誰もがやはり「なぜ？」と彼女の行動を訝り、深く考えさせられてしまう。だが、反面、僅か4つの短いモノローグで、それまでの流れが理解でき、全体の辻褄が合ったことも確かだ。だから、カミーユ・ル・セヌが「最後の景の脇台詞に作品の説明、あるいは作品を入り組んだものにしてるものがある」と指摘し、ヴィチュもまた、簡略化して「裁断されたモノローグで構成されている」<sup>(104)</sup>と書いたのだろう。

こうなると、クラヴォーの言う「(戯曲に)隠れている事柄」が、ここにあった

ようにも思えてくる。観客が「想像力」を発揮することで、それまでの劇展開の再考を余儀なくさせられたからだ。それだけではない。なぜ夫人が彼らの結婚を嬉々として進めていたかについても、彼女の生き方を通じて観客は思いを巡らせることができたのだ。

舞台では冒頭から、青年が既婚夫人を口説き続けている。しかし一方的に口説いているだけだ。夫人からの反応は、ほとんどない。彼女自身が置かれている状況は、最初も結末も変わらず同じだ。何も変わっていない。だから、大半の劇評家が「何もない」と判定を下すことにもなったのも無理はないのである。しかし、作者の目的は、この執拗な「口説き」の内容とか、それによって動揺する夫人の内面にあった訳ではなかった。もかかわらず、最後は娘同然のジュンヌヴィエーヴに夫として推薦する。観客は「はてな？」と不思議に思うだろう。矛盾を感じるからだ。

夫人は、一日中、家の中で縫い物や、子供の世話といった家事に、女中と一緒に明け暮れていた。外出する習慣もない。一方、「パリ女」に登場する夫人は、外出ばかりして、家事は女中に任せ一切しなかった。こうなると、この2人は、相反する対照的な専業主婦のように見える。だから多くの劇評家たちが、「パリ女」が存在したがために、「誠実な夫人」が執筆されたのだと書いたのだろう。夫人とは対照的な存在として、当時の人が考える「誠実な」日常を繰り返すパリ女性を見せるために書かれたと誰もが思った。

だが、本当にそうだったのだろうか？ もう1度、戯曲を読んでもみると、隠れている事柄がまだまだ多くあることに気づくだろう。ジュンヌヴィエーヴが、青年に向かって、彼女の「結婚観」とか、「夫についての認識」について話す場面。「アントランジジャン」紙のフォシュリもベックの観察力を評価した<sup>(105)</sup>この場面に関し何か「隠れている」ものはなかったのだろうか？

ジュンヌヴィエーヴは「夫など誰でもいい」。「薦められる男と（自分の意志とは無関係に）結婚することになる」。「いまのままだと妻は女中と変わらない」。「夫は妻を人間として認めていない」から「外面だけが良くて、家の中では最悪」と言う。だから、女は「子供」と「化粧」に専心して、気分を紛らわさざるを得ない。と、ランベールに訴える。現代に生きる私たちには、彼女の主張は当然なものに思える。しかし、青年は彼女の訴えを聞いても、とくに取り上げて話題にしたり

せず、従って、曖昧な返答しかなかった。そして、これを観ていた当時の観客の大半も、ランベールと同じ反応をしたのだろう。だから、劇評が「何もない」と書くことにもなったのだ。

戯曲の最初の方で、夫人は、パリの劇場で見かけた「ドゥミ・モンド」の話をする。世間は、彼女たちの陰口を叩き噂する。夫人もこの種の女性を知っていて知らないフリをする。現実には彼女たちを相手にしているランベールも話題にしない。夫人の耳元で囁くだけだ。ここにあるのは、「卑下する存在」としての女性たちだ。彼女たちの存在にベックは関心を持ってきた。ベックの戯曲のどれを見ても、この種の女性が登場していたことから容易に想像できるだろう。

彼女たちは、なぜ存在したのか？ 本人たちが悪いのか？ そうではない。それは社会が悪いと、ベックは弾劾したいのである。女たちを商品にし、金持ちの慰みものとしている社会は良くない。

だが、ベックの目に不幸と映ったのは彼女たちだけではなかった。家庭に納まっている主婦もまた、不幸という点では「ドゥミ・モンド」の女性たちと変わらない。家柄や富裕度に違いがあるだけだ。そもそも一般人の認識が女性たちと男たちとを対等に見ていないのである。こう考えると、当時の女性が置かれていた「地位」への関心が、専業主婦を主人公とした2つの戯曲を執筆した大きな契機だったと思えてくるのである。

その意味では、これが「パリ女」と表裏一体をなす作品とする指摘は正しい。だが、だからといって多くの劇評家たちが指摘していたように、「パリ女」のクロチルドが墮落した女で、こちらが美德の夫人。だから、正しい道を進めと、ベックが主張していたとするのは誤りなのではないのか。「女性だから」「主婦だから」という理由からの「束縛」や「強制」は、この時代、全ての女性に共通し、同じようにきつい。ベックが主張するのは、女性も人間として、男と対等だということだった。実際、夫人が勧める結婚話の場面を目の当たりにすれば、そのことが納得できるだろう。

「ボヴァリー夫人」<sup>(106)</sup>の例を引くまでもなく、当時のフランスでは、一定の「枠」にはめられ、身動きできない既婚夫人たちの日常が、社会問題化していた。「誠実な夫人」という言葉は、誰の耳にも、主婦として当然なこととして響く。しかし、それは、不当な圧力によって従わざるを得ない、「規律」の結果でもあったのである。

だから、最後のモノローグは、「自分遊び」の結論であり、夫人の本音だったと言えるだろう。青年とのやりとりは、言ってみれば、単調な日々を送る夫人の「退屈凌ぎ」だった。家事をこなすだけの日々の生活に飽き飽きしている夫人の一時逃れのための格好の機会、いわば夫人にとっての、「慰め」「ごっこ」だった。こう考えれば、「パリ女」の主婦が愛人を持って、アヴァンチュールを楽しんでいたのと、内容の違いこそあれ、本質的に変わらないことが分かるだろう。クラヴォーが「パリ女」の延長線上に「誠実な夫人」があると書いた<sup>(107)</sup>ことにも納得がいくのである。

どちらの夫人も、「夫人」という枠の中で行動を制限されていた点は同じだった。ルクルールが指摘したように、「パリ女」の夫人は「ただ（枠の中で）生きていただけ」<sup>(108)</sup>なのである。つまり、女性が人間として認められていない時代に、彼女たちはとくに「特別」なことをしていた訳ではなく、「ふつう」に暮らしていただけだった。だから、ベックは「パリ女」だけでなく、もう1つの戯曲を執筆せざるを得なかった。そう、この相反するように見える、2人の存在を見せることで、この時代の女性の実体を暴露したかったのだ。彼女たちが、実は相反する存在ではなかったからである。

私たちの検討で明らかにしてきたとおり、これこそ初期作品から、ベック戯曲に共通しているテーマだった。今回、この戯曲を分析したことで、私たちは、「誠実な夫人」もまた、他の戯曲と同じ動機で執筆されたことを確認できたのである。

#### 註

- 1) 「20 回以上の上演で成功だといえる」と、Alexande Arnaoutovitch : Henry Becque. Ed. P.U.F. Tome.3. P.62 にある。
- 2) Francisque Sarcey (1827-1899)
- 3) Le Temps. le 12 Jan. 1880
- 4) Fourcaud (生没年不詳) : La Vie Moderne. le 30 Jan.1880
- 5) ベックの研究家 Arnaoutovitch は、「1880 年には、「Le Ménestrel」紙、「La Petite République」紙、「La Patrie」紙、「La Lanterne」紙、「L'Evenement」

「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

紙、「La Presse」紙、「L'Illustration」紙、が、「誠実な夫人」を全く取り上げなかった」。と前掲書 (P.19) に書いている。「1月1日の、マチネー公演だったことが、災いしたのだろうか？」と書いたのは、E. Noel et E. Stoullig : Les Annales du théâtre et de la musique.1880.P.300 である。

- 6) Auguste Vitu(1823-1891)
  - 7) A.Vitu : Le Figaro. le 8 Fev. 1885
  - 8) A.Vitu : Le Figaro. le 22 Dec. 1885
  - 9) Le Moniteur Universel. le 28 Oct.1886
  - 10) Edouard Thierry(1813-1894)
  - 11) 上演後の 1886 年 10 月 28 日付の記事で、ヴィチュは、「(それはジムナズ座の支配人) Montigny が、1880 年 1 月 1 日に、観客にご祝儀として贈ったものだ。(そして)、ルネッサンス座では、去年、『パリ女』の初演と併演された。」と上演の歴史を語っている。
  - 12) 「鴉の群れ」については、拙論『『鴉の群れ』は同時代人にいかに関われたか』法政大学多摩論集 第 24 巻 2008 年を参照。
  - 13) 新しくルネッサンス座の支配人になった、フェルナン・サミュエル (本名 Adolphe Louveau. 元オデオン座の俳優) は、成功できる戯曲を探した末に、氏の眼鏡に叶って、1 月には、「パリ女」をすでに受け入れていたものの、ベック自身が指導する稽古に立ち会って、不安感を覚えたという。なにしろ、「鴉の群れ」で、すでにスキャンダルを起こしたばかりの作家の作品なのである。前評判も凄かった。当日の上演に妨害が起こるのではないかと、支配人は心配したのである。そこで、前のコメディ・フランセーズ座の支配人で、ベックとも親しかったエドゥアール・ティエリーに相談しに行った。(1 月 22 日付、ティエリー宛の手紙にそう書かれている)
- その結果、全く反対の女性が主人公の、いわば表裏関係にあるとも言える戯曲の「誠実な夫人」を、その前座として採用し騒ぎを未然に防ごうとしたらしいのである。いわば緩和剤として有効だと考えたらしい。
- だが、蓋を開けてみると、「パリ女」を巡る悪い噂は、全く根拠のないものだったことが分かる。2 月 7 日初日の上演の劇評が、この不安が杞憂だったことを明らかにしている。客席で観客が騒ぐといった波瀾もなく、上演は大

成功を納める。終演後、予想とは反対で、人々は熱狂し、称賛の騒音がなかなか止まなかったという新聞 (La Justice:le 8 Fev. 1885) の記述まである。そして、再演は、翌年の1月6日まで超満員が続き、計60回を数えたという。以上は、Alexande Arnaoutovitch : Ob.cit. P.62、による記述である。

14) Jules Clartie (1840-1913)

レパートリー入りについては、公教育大臣の、Leon Bourgeois (1851-1925) の仲介によってである。また、1890年にも、「ブルジョワ氏の、新しい、好意的な、仲介によって、『パリ女』は、コメディ・フランセーズ座のプログラムに載った。・・・人々は、ルネッサンス座での成功の後だったから、戯曲が同座でその(成功の)確認をすると信じていた。・・・真実の陰謀が、『パリ女』に対して結ばれ、戯曲を失敗させることだけに成功した。」と、Jean Robaglia の「序文」にある。(Henry Becque : Oeuvres Complètes. Tome 1. P.47)

15) 1890年の「パリ女」上演は、クリスマスを待たずにポスターが剥がされ、その後、20年間、この劇場で上演されることはなかったという記述が残っている。(Alexande Arnaoutovitch. Ob.cit. P.68)

16) 新しくコメディ・フランセーズ座の支配人となった、クラルティとの軋轢については、全集版の「誠実な夫人」の後ろに書かれている、作者自身の「あとがき」に詳しい。全集版のこの箇所には、従来、その作品について書かれていたのだが、「誠実な夫人」に限っては戯曲に関することとよりは、むしろ、クラルティとの成り染めと、自作の上演を邪魔された恨み辛みに多くのページが割かれている。また、Alexande Arnaoutovitch.によると、「世論は、『パリ女』のコメディ・フランセーズ入りを、要求して」いた(P.64)とあるし、また、バックは「回想録」の中で、「再演は、クラルティが原因で難しい」と書いている。(Henry Becque : Oeuvres Complètes. Tome 3. P.231)

17) Monsieur Scapain は、Jean Richepin 作の3幕喜劇。

18) バック作品のコメディ・フランセーズ座での上演は、「誠実な夫人」を除くと、「鴉の群れ」が1882年に18回、上演されただけである。

19) Emile Fable (1869-1955) 劇作家。コメディ・フランセーズ座の支配人は、



1913 年から 1936 年まで。

- 20) Alexandre Arnaoutovitch. Ob.cit. P.36 参照
- 21) 1889 年には、コメディ・フランセーズの、ソシエテールである、Mme Pierson や、M.Baillet が、「Union artistique valanciennoise」の利益のために、Salle Erard で企画された、ガラにおいて、「誠実な夫人たち」は上演された。(Alexandre Arnaoutovitch. Ob.cit. P.36)
- 22) Henry Becque : Oeuvres Complètes. Tome. 3. 1924. P.231
- 23) Henry Becque : Op. cit. P.191
- 24) Ibid. P.195
- 25) ドゥミ・モンドとは、当時、社交界に出入りしていた素性の怪しい女性たちの総称である。高級娼婦と翻訳する人もいるが、その意味の日本語とも少し違う。たとえば、デュマ・フィスは「ドゥミ・モンド」というタイトルの戯曲を書いており、それを読むと分かり易いかもしれない。(1855 年初演)。戯曲の主人公の女性は、寡婦の男爵夫人と名乗っているが、実は結婚したことなどない。出生証明書には実父は侯爵だと記され、結婚証明書も、夫の死亡証明書も所持しているが、みな偽物だ。長い期間、トヌラン侯爵の保護を受けていた。つまり、これは、社交界に出入りしているものの、正式の結婚をしていない、出自を明かせぬ女性たちを意味する言葉だった。主人公の女性は、外見上は、崇高な精神と英知を持っており、彼女の素性を知らずに結婚を申し込む貴族男を巡って、物語は展開する。最後は、同じ貴族の男が、真相を暴露して終わるが、戯曲ではこの友人を「誠実な男」と称賛しており、こうした立場はベックとは相容れぬものだったように見える。
- 26) Henry Becque. Ob.cit. P.198
- 27) Ibid. P.199
- 28) Ibid. P.201
- 29) Ibid. P.203
- 30) Ibid. P.207
- 31) Ibid. P.208
- 32) Ibid. P.209

- 33) Ibid. P.210
- 34) Ibid. P.210
- 35) Ibid. P.211
- 36) Ibid. P.211
- 37) Ibid. P.211
- 38) Ibid. P.211
- 39) Ibid. P.212
- 40) Ibid. P.213
- 41) Ibid. P.214
- 42) Ibid. P.215
- 43) Ibid. P.215
- 44) Ibid. P.216
- 45) Ibid. P.218
- 46) Ibid. P.220
- 47) Ibid. P.222
- 48) Ibid. P.228
- 49) Ibid. P.230
- 50) 他にも、11月8日の「パトリ」紙では、クラヴォー氏が、「私は、いままでこれ以上よく歓迎された戯曲を見たことがない」と書いている。A.Claveau (生没年不詳): La Patrie. le 8.Nov.1886
- 51) Henry Bauer. (1852-1915): L'Echo de Paris. le 29 Oct.1886
- 52) Fauchery. (生没年不詳): L'Intransigeant. le 29 Oct.1886
- 53) M.René. :L'Autorité. le 29 Oct.1886.
- 54) Jules Lemaitre (1853-1914) .: Le Journal des débats politiques et littéraires. le 1er Nov.1886
- 55) Camille Le Senne. (生没年不詳): Le Télégraphe. le 29 Oct. 1886
- 56) Paul Perret (1830-没年不詳 小説家): La Liberté. le 1er Nov. 1886
- 57) Leopold Lecour : La Nouvelle Revue. le 1er Nov.1886. には、「それは『パトリ女』とは正反対のものだ。」とある。
- 58) H.de.Pené. (1830-1888): Le Gaulois. le 28 Oct.1886. には、「『パトリ女』の、

「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

香辛料のきいた放縦さに、前もって改悛したように、見える。」とある。

- 59) Jules Lemaitre : Le Journal des Débats politiques et littéraires. le 1er Nov.1886.には、「夫人は、『パリ女』の夫を裏切ったクロチルドと同じ方法と同じ外観で誠実であった。」とある。
- 60) F.Sarcey : Le Temps. le 1er Nov. 1886.
- 61) Edmond Stoullig (生没年不詳) : Le National. le 29 Oct. 1886
- 62) Camille Le Senne : Le Télégraphe. le 29 Oct. 1886
- 63) Leopold Lecour : La Nouvelle Revue. le 1er Nov. 1886
- 64) 詩人の Arnaud Berquin (1747-1891) の感傷的な詩風から生まれた表現。
- 65) Adrien Barcusse (生没年不詳) : Le Siècle. le 1er Nov. 1886
- 66) Henry Bauer : L'Echo de Paris. le 29 Oct. 1886
- 67) Fauchery : L'Intransigeant. le 29 Oct. 1886
- 68) Jules Lemaitre : Le Journal des Débats politiques et littéraires. le 1er Nov. 1886
- 69) Edmond Stoullig : Le National. le 29 Oct. 1886
- 70) Fauchery : L'Intransigeant. le 29 Oct. 1886.
- 71) F.Sarcey : Le Temps. le 1er Nov. 1886
- 72) A. Vitu : Le Figaro le 15 Fev. 1882. また、サルセーとヴェスもヴィチュと同様の見解だ。ヴェスは、「パリ女」初演の劇評 (Jean Jacques Wesse. 1827-1891) : Le Journal des Débats politiques et littéraires. le 16 Fev.1885) において、そう記している。
- 73) A.Vitu : Le Figaro. le 8 Fev.1885 と le 28 Oct.1886
- 74) Fauchery : L'Intransigeant. le 29 Oct. 1886
- 75) Louis Ganderax (1855-1935) : La Revue de deux mondes. le 1er Nov.1886
- 76) エミール・ゾラ Emile Zola (1840-1902)
- 77) 拙稿『『鴉の群れ』は同時代人にどう観られたか』(前掲書)と、拙稿『『パリ女』は同時代人にどう観られたか』法政大学多摩論集 第22巻 2006年参照。
- 78) Jules Lemaitre : Le Journal des Débats politiques et littéraires. le 28 Dec.1885

- 79) Jules Lemaitre : Le Journal des Débats politiques et littéraires. le 1er Nov.1886
- 80) Auguste Vitu : Le Figaro. le 8 Fev. 1885
- 81) Auguste Vitu : Le Figaro. le 22 Dec. 1885
- 82) Auguste Vitu : Le Figaro. le 28 Oct. 1886
- 83) Camille Le Senne : Le Télégraphe. le 9 Fev.1885
- 84) Camille Le Senne : Le Télégraphe. le 29 Oct.1886
- 85) Francisque Sarcey : Le Temps. le 28 Oct. 1886
- 86) Francisque Sarcey : Le Temps. le 16 Fev. 1885
- 87) 「新しいシステム」という表現については、「パリ女」初演の書評（前掲書参照）で、ヴェスも、「ベックのシステム＝独自の作劇術」と書いた。だが、演劇の目的を「気晴らし」だと考えている彼は、リアリズムに基づく、現実そのものをコピーすると考える「システム」ということで、これを評価してはいなかった。
- 88) Francisque Sarcey : Le Temps. le 28 Dec. 1885
- 89) Francisque Sarcey : Le Temps. le 12 Jan. 1886
- 90) Francisque Sarcey : Le Temps. le 1er Nov. 1886
- 91) レオポルド・ルクールが書いた劇評の掲載紙はそれぞれ異なる。「パリ女」を、「フランス・リーブル」紙に、「誠実な夫人」を「ヌーヴェル・ルヴュ」紙の劇評にそれぞれ載せた。
- 92) Leopold Lecour : La France Libre. le 9 Fev.1885
- 93) Leopold Lecour : Evolution contemporaine au théâtre. La Nouvelle Revue. Sep.-Oct. 1886
- 94) Leopold Lecour : La Nouvelle Revue. le 1er Nov. 1886
- 95) Henry Bauer : L'Echo de Paris. le 9 Fev.1885
- 96) Henry Bauer : L'Echo de Paris. le 23 Dec.1885
- 97) Henry Bauer : L'Echo de Paris. le 29 Oct.1886
- 98) A.Claveau : La Patrie. le 16 Fev.1885
- 99) A.Claveau : La Patrie. le 8 Nov.1886
- 100) F.Sarcey : Le Temps. le 1er Nov.1886

「誠実な夫人」は同時代人にどう見られたか

- 101) Edmond Stoullig : Le National. le 29 Oct.1886
- 102) Jules Lemaitre : Le Journal des Débats politiques et littéraires. le 1er Nov.1886
- 103) Camille Le Senne : Le Télégraphe. le 29 Oct. 1886
- 104) Auguste Vitu : Le Figaro. le 28 Oct. 1886
- 105) Fauchery : L'Intransigeant. le 29 Oct. 1886
- 106) 「ボヴァリィ夫人 (Madame Bovary)」は 1856 年 10 月から「Revue de Paris」誌に連載されたギュスターヴ・フロベール Gustave Flaubert (1821-1880) の小説。連載当時から風俗壊乱と宗教冒涇の非難を浴び、やがて訴訟事件にまで発展する。しかし、1857 年には無罪判決。
- 107) A.Claveau : La Patrie. le 8 Nov.1886
- 108) Leopold Lecour : La Nouvelle Revue. le 1er Nov. 1886